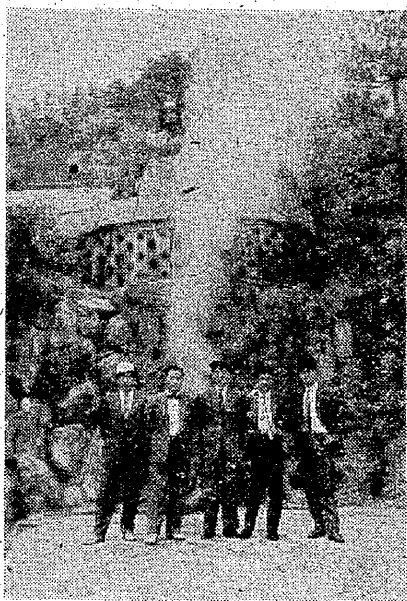


原告団

遺族・CO裁
判、災害責任
追求、特集号
第六十二号



上の写真、別府温泉への5人組旅行。まんなかの人が富久一夫さん。左の写真は、一夫さんの母親のおばあちゃん。たずねてゆくと、思わず頬をほころばせてニツコリ。その表情の奥に、気丈さがかくれているのだ。

原告団レポート

遺族

富久シマさん

愛唱のうた

「大い手 細い手
日焼けの手と手
色気はないが、わしらの手
夜には針仕事
子どもたちの服縫えは
勇気が湧いてくる」
みんなの手と手
昭和三十八年十一月九日のあの
三川鉱炭じん大爆発のとき、一酸
化炭素の猛毒ガスを吸い、真っ暗
な坑底で息絶えていった一人の青
年労働者——富久一夫さんが生前
愛唱していた歌である。

彼は三池闘争までは、三川支部
合唱団の団員の一人として、働く
者のうたをひたひたに積極的に積
極的に奔走。三十四年の第七回九州
のうた大会には、三池労組代
表としてなかとともに参加して
る。

不幸の底へ

その、富久一夫さんは死んだ。
もはや二度と彼の唇から聞くこ
とができなくなった。手、の歌
は、いきなり不幸のどん底につき

落ちてしまった老母——シマ
さんの死後幾日もたない日のこ
と。妻のシマさんは、夕べの食卓
をとのえながら「ごはんです
よ」、と勝った。「そうか」とい
い、コタツに暖まっていた体
を起してかけたとき、常職さん
はその場にどうと倒れてしまっ
たのである。

苦しめられ

一夫さんは、三川鉱の乙方に所
属する採炭工だった。有明海の
海面下深さ三百五十メートル、坑
口から約四百五十メートルほど
はいた地底に展開する二十五昇
部内。そこに、彼の働く採炭切羽
の現場はあった。

体は一日でげっそりやせてしまっ
て、フロにゆく元気もなかったで
すよ。特に富久さんは正直者だっ
たために、仕事をしているうちに
あの熱中症にかかり、何回かひ
いて倒れたかわかりません」。
それでいて、かんじんの賃金は
といえは、すでに年輩者だった吉
井さんの場合でさえ、爆発直前の
その年の十月分の実績が、総計
で三万四五百円に過ぎなかった。

気丈と行動

わけても、その前年の六月に一
夫さんのもとに嫁いできて、まだ
一年と八月月添ったばかりのカオ
ルさんにすれば、余りにもむづい
族たちにおくっている。盆と暮れ

「お兄ちゃん(シマさんは、一
夫さんのことをこう呼ぶ)、あん
たといっしょにがんばりにゆくと
いね」そういっているが、タスキと
ハチマキを手に行動にかけつけ
る。シマさんのさかんな心意気。

老いゆく命

「あ、がんばりにいよよ」 お兄ちゃんのハチマキに決意をこめて

老いの身に寿命の足音も

の、わずかの御仏前さえ、巨大な量の石炭をみるうちに
どうしたわけか絶えておとすれが
なくなつたこともあって、亡夫一
夫さんの四十九日の仏事がすむ
と、彼女は、亡夫とともに生きて

話をやいてくれている。
嫁さんの名はミドリ。すでに二
人の間に、四つの子供が生まれ、
つの子供は、お兄ちゃん(シマさん)と一
つの子供は、お兄ちゃん(シマさん)と一
つの子供は、お兄ちゃん(シマさん)と一
つの子供は、お兄ちゃん(シマさん)と一

一年半後に

六十四歳という老境に足を踏み
入れていた、父親の常職さんへの
衝撃も深刻だった。
野辺のおくりのいっさいの儀式
をすませたものの、まだ富久一夫

「出動するため家を出るとき
姿はあたらしくなりました。その日の仕
事を終えてわが家に帰るたびに、
ハッハッハ……」——シマ
さんは、目は見る影もなく落ちくばみ
んは笑った。

お兄ちゃん(シマさん)と一
つの子供は、お兄ちゃん(シマさん)と一
つの子供は、お兄ちゃん(シマさん)と一
つの子供は、お兄ちゃん(シマさん)と一